

## 世

界を旅して、自分が日本人だということに気づかされるエピソードはいろいろあるが、なかでも忘れたいのが、以下の四つの例だ。

最初に、中東研究を始めて駆け出しの頃、イラクの役所に統計資料を求めたときのことだ。情報統制厳しいフセイン体制のもとで、係のイラク人が資料を渡しながら私に言った。「で、日本は代わりに何をくれるんだ？」。一世紀にわたり西欧諸国に首も手も突っ込まれて、いいようにされてきた中東諸国にとって、「知る」こと自体が内政干渉の代名詞になっている。

第二のエピソード。バグダード大学農学部を訪れた時、「日本には木に生えるキノコがあると聞いた。英語でいいから作り方のテキストが欲しい」と切望された。隣国ヨルダンでは農園主が、「溜池に魚を放つたら、増えた。養殖の方法を知りたい」とりあえず日本に戻って調べたが、日本語の本しかない。

研究対象の中東から「日本人」として何か求められても、何も返せない自分に辟易しながら、

二〇年の月日を経て、ヨーロッパで開催された、とある国際学会の会議に出席した時のこと。日本人はおろか、アジアからの出席者もないなかで、懇親会でぼつねんとしている私にアメリカ人研究者が声をかけた。「よかったわ、貴女がいてくれて。唯一のアジア人だもの、この学会を『国際』っぽくするには大助かりだわ」。

会議には、中東出身や中東系の研究者はたくさん溢れていた。彼らは「会議をクローバルに見せるために」いるのではなく、ともに同じ研究に携わる者として、国籍に関係なく、ここにいる。さて、この日本人はここで何をしているのだろうか？

最後のエピソードは、最近の、同じく国際会議の席上だ。日本の某団体が資金援助して開催された会議である。日本人研究者で出席しているのは、私だけ。司会者が某団体の支援に謝辞を述べる。欧米や中東出身の出席者が一斉に私を見て、拍手を送る。私は、自分が「服を着たキャッシュ・ディスプレイ」みたいに見えているのかと

思うと、もともと落ち着かない。

こういう経験を繰り返してきて、でも最後の経験ではなんとか身の処し方が見えた。会議の順番通り、私は研究発表を行ったのだが、どうも研究内容を知ってからは、彼らの目から日本人 A T M の幻影が消えたみたいなのである。



イラストレーション：栗岡奈美恵

さかい けいこ／東京外国語大学大学院教授。1982年東京大学教養学部卒業後、アジア経済研究所入所。在イラク日本国大使館専門調査員などを経て現職。イラク、中東を専門として現代政治を研究。日本中東学会理事。

# 何のために、日本人

● 酒井啓子